

「当たり前が幸せ」

長泉町立長泉中学校一年 勝倉妃菜

「マスクしなくてもいいんだー！」

これが最近私が幸せに感じたことである。マスクをすることが当たり前前の生活が四年続いた。だから毎朝マスクを準備するのが日課になっていた。外してまもない頃はマスクをしないと落ちつかないと思う日もあった。習慣って怖い。

この本はコロナ禍でいろいろなのが制限される中で、人々の日常や気持ちなどの変化が書かれている。

当時世界的なパンデミックとニュースでやっていた。それは私の身近な話ではない。日本に来る前はそう思っていた。しかし、あつという間に日本でも大流行。私の小学校、中学校生活は今だけなのにな、と思う日常がはじまった。色々な制限の中、自粛期間をなんとなく過ごしていた。医療従事者の方たちがコロナを家に持ち帰らないよう、自宅に帰らず人々を救っているというニュースを見たときは、初めて胸が苦しくなった。移したり、かかったりしないように、手洗いやうがい、消毒をこれまで以上にしっかりするようになった。

本の中では、コロナ禍によって部活にも制限があった。鈴音のバレーの大会は延期に次ぐ延期を重ね、結局なくなってしまった。千暁は美術部。作品展はあるものの自分の作品を審査されることはなく、何のために絵をかいたらいいかわからなくなっている。それぞれが我慢を強いられているのに、その不満をどこにもぶつけないことが出来ない。さらに、仕方ない、の一言で片づけられてしまう日々。

私は小学五年生からバレーボールを始めた。ちょうどコロナ禍で練習が出来なくなったり、試合がなくなったりすることも多々あった。試合中はマスクをしなくてもいいが、その他の時はマスクの着用を義務づけられた。コロナ前とは異なるルールで試合をすることもあった。このやり方に不満があった私は、練習をがんばってもそれを発揮する場所がないことを理由に、頑張る意味を失って怠けてしまう鈴音の気持ちが痛いほど分かった。

「試合できなくて悔しいー！試合がしたいー！ー！」

大声を出すことはもちろん禁止されていたが、自分の中で消化しきれないまま溜まっている気持ちを鈴音は吐き捨てた。顧問の生成が知って、鈴音は怒られたがその後先生に言ったのである。

「試合をさせてやりたかったー！ー！」

この文を読んだとき、目頭が熱くなった。何かと禁止を告げる先生。しかし、部活の頑張りをいちばん近くで見ているのも先生だった。やるせない気持ちを感じ取り、先生も同じ気持ちでいてくれたのだと思ひ、私も嬉しくなった。

千暁は絵を描くことに身が入らず、絵を描けなくなっていた。審査がなくなり、どうしたらいいのかわからなくなっていたからだ。そんなとき、先生からプロもアマチュアも問わず出展できる作品展のチラシをもらう。色々なことを我慢しながら、今できることを精一杯考え、頑張る鈴音などの姿を見て、千暁もいろんな思いをキャンパスにぶつけた。結果として中学生初出展にして入選をもらった。

はじめは深く考えていなかったものの、コロナでたくさんさんの行事が中止になり、私もコロナを憎んだが、この本を読んでただ出来ない諦めてしまうのではなく、どうしたらできるのかを考え、新しい道を切りひらいていくことが大切だと思った。自粛というが、自ら行っている行動だけではなく、同調圧力に負けて、諦めたことがある。そんな自粛でも諦めなければ別の考えを見出せる時間になったのだらう、と今は思えるようになった。

現在は、コロナがはじまって四年ほど経った。コロナ前と同じ生活ができるようになってきた。当たり前前に普通の生活をしていたときは、何ごとも深く考えずに毎日を過ごしていた。しかし、コロナが行して、我慢の生活を強いられた。普通に学校にいける喜び、距離や接触など何も気にせず友達と遊んだり、バレエをしたりそんな毎日を大切にできる。この生活がしばらくも続けば、きっと慣れてこれが当たり前の毎日に、再び変わってしまう。だが、何も気にせず生活できるということは幸せともいえるだろう。人間はいつも失ってからその大切さに気づいてばかりで、身勝手だなと思う。

コロナでそれぞれ大変なことが多かったと思う。しかし、きっとその中で最善の選択をして、今を生きている。世界的にコロナを気にしなくてもいい日が一日でも早く来ることを願っている。制限のない日常の幸せをかみしめたい。もう何も諦めない。